

## 2020 年度 相模女子大学 点検評価報告書

相模女子大学  
学長 田畠 雅英

### はじめに

2020 年度における相模女子大学の教育・研究活動等についての点検評価は、2020 年 3 月に施行された「相模女子大学内部質保証に関する規程」に沿って実施した。この点検評価は 2020 年度から始められ、今年度は第 2 回にあたる。まず、自己点検評価委員会において、各学科、各学部、各研究科、各事務部（以下「各機関」）を単位として、大学基準協会の評価基準に照らした点検・評価を行い、評価結果をとりまとめた後、質保証委員会において審議・評価を行い、各機関に結果をフィードバックするとともに、必要に応じて改善を指示した。それに対して、該当機関に改善報告書の提出を求め、質保証委員会において審議した後に大学評議会において報告を行った。これによって、PDCA サイクルが適切に運用されるよう努めている。

本報告書は、質保証委員会委員長である学長の責任においてまとめたものであり、学内外に公表される。

### 1. 点検・評価結果の総括

2020 年度において何といって最大の課題となったのはコロナ禍への対応である。春学期はオンライン授業を全面的に展開することとなり、秋学期も対面授業の実施は限定的にせざるを得なかつたが、事前の準備を十分に整える間もなかつた中で、各教員や学科がそれぞれに教育の質を低下させないよう、可能な限りの対応を行つて、1 年間の教育の維持に努めた点は、高く評価すべきである。それでも、とくに実験や実習については、オンラインによる実施が不可能な分野もあり、補完が課題となつた部分がある。また、各教員や学科において努力や経験が積み重ねられたが、それを共有して、学部や大学全体としての体制構築に結びつけていくことまではまだ十分に行なえておらず、今後の課題である。キャンパスライフが従来とは大幅に様相を変えた中で、不安や当惑を感じた学生も多く、学修支援とともに、心理的なサポートも課題となつた。

学修成果の可視化は重要な課題であるが、これもコロナ禍の対応に追われ、また授業方法の急激な変化などがあつたことにもより、十分な進展を得ることができなかつた。オンライン授業で焦点の一つとなつた ICT の活用は、学修成果の可視化とも密接な関係があり、今後の推進が課題となる。

専門職大学院社会起業研究科は開設初年度でコロナ禍に遭遇することになったが、オンライン授業の適切な運用により、大きな混乱なくスタートすることができた。次年度以降に向けて、運営を安定した軌道に乗せていくことが望まれる。

学生募集については、コロナ禍によって募集活動を例年より制限せざるを得なかったこともあり、2021年度入学者は前年度に比べれば全体として減少する結果となった。今後、学部だけでなく、大学院においても、安定した学生募集を行っていくことは依然として重要な課題である。一方で、学生数の増加傾向が続き、授業運営にいっそうの工夫を加える必要が生じている学科もある。

事務部門についても、コロナ禍による授業方法の急激な転換と、感染状況の変化に対応した対面授業の実施など、業務量が大幅に増加する中で、大学の教育維持に尽力した各部署と職員の努力は高く評価されるべきである。ただ、オンライン授業の拡大によって、本学のICT環境の不十分さも明瞭となった。これについては、年度中にも改善の努力が行われたが、さらに改善をめざす必要がある。また、オンライン授業に対する教員および学生への支援体制の充実も大きな課題である。これらの問題については、2021年4月には情報システム課が新設されることになり、対応の専門部署の設置によって、改善が大きく進むことが期待される。

本学の特色でもある社会連携・地域連携については、2020年度はコロナ禍により、その活動を縮小・制限せざるを得なかった。とりわけ、学生の参加による事業は、安全の確保という観点からも、中止や延期を余儀なくされたものも多い。その中にあって、オンラインなどを活用した新たな取り組みの試みが積極的になされたことは、今後の活動の幅を広げるという観点からも、高く評価することができる。

内部質保証については、目標設定の明確化と予算も含めた各過程の有機的な連動を高めてPDCAサイクルを有効かつ迅速に運用していくために、質保証委員会を中心として、各部の意識を高め、ルーティーンに陥ることのないよう努力していきたい。

各学部・学科、研究科、各事務部署において、点検評価に着実に対応していただいたことに感謝するとともに、今後ともいっそうの協力をお願いしたい。

## 2. 中長期基本計画の総括と新たな中期計画の策定

Sagami Vision 2020の実現に向けた中長期基本計画の総括は以下の通りである。

計画に掲げられた6つの目標については具体的な施策や改革を推進し、ほぼ所期の目標を達成したものもあれば、社会環境等の状況の変化によって目標そのものの見直しがなされたものもあるが、その成果については以下のとおりである。

### ①教育目標の共有と具現化

スローガン「見つめる人になる。見つける人になる。」や「発想女子」といった本

学のブランドは、社会連携といった具体的な教育活動と結びつき、学内外で一定の認知度を得ることに成功した。

#### ②新しい教育体制の確立

新たな教育プログラムとして、社会起業家を育成する専門職大学院「社会起業研究科（MBA コース）」を 2020 年度に開設するとともに、本学の特色である「発想教育」と「地域連携活動」を活かした副専攻制度「学科横断プログラム」では、就職を視野に入れた実践的なプログラムを通じて学生のキャリア形成を支援している。

#### ③教育課程の整備と教育内容の向上

各学科においてカリキュラムの検討が継続的に行われており、共通教育科目の新カリキュラムも軌道に乗っている。教育内容の向上に向けては授業支援システム（manaba）が完全導入され、学修成果の可視化に向けた取組が前進した。

FD 研修会の内容や開催方法を工夫することで、年々、その参加率が向上しており、学科ごとの FD 活動に繋がってきている。

#### ④学習環境の整備

学生の学修と生活をワンストップで支援することを目的に大学組織の改編を行い、学修・生活支援課を設けるとともに、学生の自主学習や補習教育のためのラーニングコモンズを設置し、その活用法を試行している。コロナ禍において顕在化した学習環境については、オンライン授業に対応できるよう、PC や Wi-Fi 環境の整備が喫緊の課題である。

#### ⑤学生支援の充実

「夢をかなえるセンター」では 3 つの課（連携教育推進課、就職支援課、生涯学修支援課）が連携することで、学生のキャリア形成をサポートする体制が充実してきており、学生相談室、保健センターなど、学生の心身の不安に対応する態勢の充実も進めている。

#### ⑥入学者増に向けた募集の戦略と戦術を策定

入学者選抜及び学生募集業務全般において教職協働で実施する体制が構築されており、2019 及び 2020 年度においては、定員を超える入学者を確保し、全体としての定員充足率もほぼ 100% を満たしている。

上記の成果を受け、2025 年の創立 125 周年に向けて、Sagami Vision で掲げられている長期的な教育構想の実現やその前提条件のもとに、2021 年度から 2025 年度までの 5 年間に取り組むべき計画として、「SDGs を指針とした、開かれた大学へ」をテーマに、中

期計画を策定した。そのポイントは以下の4点である。

I 地域と連携し、様々な人々と触れ合う学びの場であること

—地域連携、社会連携活動をはじめ多様な人々との交流の推進と、その大学教育としての位置づけの確立—

II 幅広い知の交流のある学びの場であること

—学部・学科のありかたの柔軟な再構築と、学部・学科を超えた教育態勢の構築—

III 学びが可視化され、将来へつながる学びの場であること

—ICTの活用による学習プロセスの可視化の促進と、その活用による教育の検証—

IV 卒業生とつながり、多くの社会人にとって持続的な学びの場であること

—卒業生との交流の深化と、卒業生はじめ社会人のための教育システムの構築—

上記のための具体的な施策を定め、担当部署やワーキンググループ等において、実現に向けた作業を開始しているところである。

以上

2020 年度【最終】相模女子大学  
学芸学部 点検評価報告書に対するフィードバック

<学芸学部>点検評価報告書

総括（200 字程度）	COVID-19 下、全学科限定された環境下各教員の努力により、カリキュラム・ポリシーに沿った教育を行うことができた。各学位課程分野の特性に応じた学習成果を測定するための新たな指標作成など課題は積み残されたが、厳しい環境下においてディプロマ・ポリシーに基づいた成績評価、単位認定が行われた。 今後、COVID-19 下での学生募集方法は予断を許さない。また、組織運営や学生支援、社会連携・社会貢献（学園連携）なども制約された環境、状況下で各教員の努力に頼らざるを得ない。蓄積したスキルとノウハウを共有し、関係各所との連携を行うことで、教育・研究を発展・推進させたい。
2020 年度に認識した重点課題に対する 2021 年度の改善に向けた計画や 目標（200 字程度）	COVID-19 の厳しい環境下で各教員の努力により各学科の 3 つのポリシーに基づく取り組みが行われた。ただし、来年度以降も COVID-19 下での環境が想定され、学生の就学面だけでなく生活面、経済面、ストレス面のみならず新しい問題が顕在化してくる可能性も高い。さらには、学生だけでなく、教員側の問題（労働面、ストレスなど）も軽視できない。1 年間、試行錯誤の連続ではあったが、蓄積された知恵やノウハウもできた。しかし、対処すべき新たな課題も明らかになっている。学生がどのような状況においても有意義であったと感じられる安全で安心して学べる環境を提供することである。また、各学位課程分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の設定や学位授与方針に明示した学生の学習成果を把握及び評価するための方法の開発は今後の大きな課題として残されている。
総合評価（S・A・B・C）	A

<学芸学部>質保証委員会からの点検評価報告書に対するフィードバック

評価結果に対する コメント（200 字程度）	多様な教育・研究内容を持つ 5 学科および各教員それぞれに、コロナ禍においても、教育の質を低下させないための努力を行い、1 年間の教育を維持したことは評価できる。Zoom の活用や manaba 上でのフィードバックや個別指導は、学生の孤立感を減少させ、コロナ禍の状況での学生の学修や学生生活を維持するために有効であったと考えられる。オンラインを有効活用して、学位授与に係わる質保証の場でもある卒業研究発表なども行われた。次年度以降もコロナ禍の影響は続くと考えられるが、本年度に蓄積された工夫や方法論にさらに磨きをかけてもらいたい。
改善事項（200 字程度）	オンライン授業に関する知見やノウハウが個々の教員においては蓄積されてきてはいるものの、それが十全に共有されているとは言い難い。また、学生の満足度を高めるためにも、教員と学生、また学生同士のコミュニケーションなど、授業以外でのキャンパスライフを実感できる工夫をさらに行う必要がある。教員のストレス軽減のための環境整備は、教育維持のために、学科・学部での努力とあわせ、全学での連携が必要である。
総合評価（S・A・B・C）	A

2020 年度【最終】相模女子大学  
人間社会学部 点検評価報告書に対するフィードバック

<人間社会学部>点検評価報告書

総括（200 字程度）	<p>1) 入学者数について 本学部を構成する社会マネジメント学科と人間心理学科は、それぞれ 140 名（定員 120 名）と 127 名（定員 110 名）の入学者を迎えることができた。</p> <p>2) オンライン授業の実施方法の工夫について 各科会等において ICT ツールやその操作法についての情報を共有し、教員相互で積極的にサポートし合うことにより、授業方法が大いに改善した。</p> <p>3) 学生ケアについて オンライン授業の長期化に伴う学生の精神的負荷が危惧されたため、両学科では各教員が担当学生のケアを行うとともに、各学科独自の取り組みも行った。</p> <p>4) 社会福祉士課程について 社会福祉士国家試験の合格率を高めるべく、受験指導や模擬試験を積極的に実施したが、本学の合格率（21.4%）は全国合格率（29.3%）を下回るものであった。</p>
2020 年度に認識した重点課題に対する 2021 年度の改善に向けた計画や 目標（200 字程度）	<p>1) 授業の実施方法について 2021 年度は対面授業の割合が増加する見込みとなっている。ただし、学生の中には covid-19 への感染を恐れて対面授業に拒否反応を示す者もいるため、「ハイブリッド型授業」等を積極的に導入する。</p> <p>2) 学生ケアについて 引き続き、実施していく。各クラス担任によるケアに加えて、各学科独自の取り組み（対面での交流やオープンチャットなど）も積極的に実施する。</p> <p>3) 社会福祉士課程について 国家試験合格率を高めるべく、受験指導や模擬試験を強化する。また、実習の covid-19 対策として、2021 年度に「代替実習プログラム」を作成する。</p> <p>4) 公認心理師対応カリキュラムの運用について 2021 年度から実習が始まる。その準備は「公認心理師部会」を中心として進めているが、業務量過多等の問題が生じている。今後、運用体制を安定化させたい。</p>
総合評価（S・A・B・C）	A

<人間社会学部>質保証委員会からの点検評価報告書に対するフィードバック

評価結果に対する コメント（200 字程度）	コロナ禍による困難な状況において、オンラインによる授業運営、および地域活動の実施に、各学科が工夫して取り組み、教育の質の向上が図られたことは高く評価できる。また、修学や生活に関する学生への支援・対応に注力し、積極的に取り組んでいることも評価できる。社会福祉士課程については、合格率についてはさらに向上が望まれるととも、2 期生についても一定の合格者を出したことは評価してよいと考える。
改善事項（200 字程度）	オンラインと対面を併用した授業実施における円滑な授業運営と学生への支援・対応に継続して取り組むことが望まれる。社会福祉士課程については、実習指導や受験指導体制の強化を図ることが課題となる。また、課程設置後、3 年目となる公認心理師課程については、運営体制のさらなる整備に努めることを期待したい。
総合評価（S・A・B・C）	A

2020年度【最終】相模女子大学  
栄養科学部 点検評価報告書に対するフィードバック

<栄養科学部>点検評価報告書

総括（200字程度）	年度当初から新型コロナウイルス感染対策として、対面授業の実施が困難となり、諸整備や周知を経て5月から主としてManabaを使ったリモート授業を実施した。教員、学生の双方ともに不慣れな授業運営であったが、講義科目については目標を達成できている。一方で、実験実習科目は本来が学生の体験を基に学修するものであり、教材提示等の工夫による効果も限定的と言わざるを得ない。年度後半には、実習実験を中心に対面授業を再開したが、受講人数の制限、授業前の健康チェックや授業後の消毒といった感染対策が必要であった。また、教員はリモートと対面の重複開講のための負担が増えた。今年度は、著しい学修環境の変化に方策を尽くした結果、大きく損なうことない成果を得た実感はあるものの、達成できなかつたことがあり、その解消を今後の課題としていく。
2020年度に認識した重点課題に対する 2021年度の改善に向けた計画や 目標（200字程度）	両学科に共通する課題として、アドミッションポリシーに沿った入学者選抜方法、入学者数の確保、そして補完のための初年度教育があり、それぞれの学科で具体的な取組案が示されている。これには、入試制度別に学習成果到達度をデータ化が有益な根拠となっているので、状況把握のためのデータ化に努める必要がある。また、在学生では、実験実習科目が新型コロナウイルス感染対策により簡略化せざるを得なかつた事項が生じているため、進級した学年で補講を行うとしている。
総合評価（S・A・B・C）	A

<栄養科学部>質保証委員会からの点検評価報告書に対するフィードバック

評価結果に対する コメント（200字程度）	コロナ禍の中で、各学科・教員の努力によって柔軟に授業運営を行い、授業運営を維持したことは高く評価できる。栄養系の学科教育にとって実験実習科目は非常に重要な位置を占めるが、この点でも可能な限りの対応を行って教育を行っている。積み残した部分があることはやむを得ない面があると言えるが、できる限りの対策が必要である。
改善事項（200字程度）	対面による授業時間を十分確保できなかつたために積み残した課題については、補完の努力がさらに期待される。募集については、志願者数・入学者数とも楽観視できず、募集強化のための具体的な取り組み案をもつた戦略を立てることが望まれる。
総合評価（S・A・B・C）	A

**2020 年度【最終】相模女子大学大学院  
栄養科学研究科 点検評価報告書に対するフィードバック**

<栄養科学研究科>点検評価報告書

総括（200字程度）	2020 年度の研究科の主たる課題は、第一に入学者の増加、第二に教育課程の強化と学位審査基準の明確化の継続であった。第一については、新型コロナウィルス感染症拡大の影響のため学生向け説明会を開催できなかつたが、大学院の活動に関する web page を随時更新するように努めている。第二のうち、教育課程については、前年度に引き続き副指導教員制度による研究指導体制の強化、及び、学期ごとの「研究指導計画書」と「ループリック評価表」の提出を行つた。そして、学位審査の質の向上と公正性保持のため、前年度試行した予備審査期間の運用を継続している。
2020 年度に認識した重点課題に対する 2021 年度の改善に向けた計画や 目標（200字程度）	2020 年度に認識された研究科の重点課題は、第一に入学者数の改善、第二に教育課程の再構築と、学位論文の質の向上である。コロナウィルス感染症拡大の影響によりオンライン授業が増えたが、その長所も認識できしたことから、今後も活かしていきたい。2021 年度の改善に向けた計画として、第一に入学者数の改善を目指し、学生募集のための取り組みを積極的に行っていく。第二のうち、教育課程については、来年度からの新カリキュラムの円滑な運用に向け、教員間で準備を進めている。また、研究指導体制の強化と学位審査基準の明確化を継続し、特に博士前期課程の修士論文の質の向上を図り、後期課程にもつながるパスを明示していく。
総合評価（S・A・B・C）	B

<栄養科学研究科>質保証委員会からの点検評価報告書に対するフィードバック

評価結果に対する コメント（200字程度）	研究指導体制の強化と学位審査基準の明確化は適切な取り組みであり、評価できる。次年度から新カリキュラムが始まり、さらに充実した教育が行われる体制が整うものと期待したい。
改善事項（200字程度）	学生募集について、入学者を増加させることは喫緊の課題である。とくに博士前期（修士）課程の募集においては、具体的な取り組み案をもって臨むことが期待される。
総合評価（S・A・B・C）	B

**2020 年度【最終】相模女子大学大学院  
社会起業研究科 点検評価報告書に対するフィードバック**

<社会起業研究科>点検評価報告書

総括（200 字程度）	2020 年度は 24 人の第 1 期生を迎えてスタートした。新型コロナ感染拡大の影響から、平日はすべて ZOOM を使ったオンライン授業となつたが、スムーズに実施できた。土曜日の対面授業についても、感染拡大時期にはオンライン授業に切り替えた。また入試説明会もオンラインにせざるを得ない時期があり、2021 年度入試の第 2 期生は 12 人となった。
2020 年度に認識した重点課題に対する 2021 年度の改善に向けた計画や 目標（200 字程度）	2022 年度入試についても新型コロナ感染対策が必要となると予想される。入学者確保に向けた各種施策をより積極的に実施していく必要がある（ターゲット学生の検討、入試説明会・フォーラム・ネット広告、連携組織への協力要請等）。また設置時に審議会より社会起業関連の専門科目の増設のアドバイスがあったため、2021 年度に検討する予定である。
総合評価（S・A・B・C）	A

<社会起業研究科>質保証委員会からの点検評価報告書に対するフィードバック

評価結果に対する コメント（200 字程度）	開設初年度にコロナ禍に見舞われることになったが、Zoom の活用などにより、スタートの 1 年を乗り切った努力は高く評価できる。教員と学生相互の熱意がかみ合った結果ということもできる。今後いっそう指導に磨きをかけて、初の卒業生たちを送り出すようにしてもらいたい。
改善事項（200 字程度）	コロナ禍で募集活動にも制限が生じることとは思うが、開設後数年間で募集を安定した軌道に乗せることができることが重要である。審議会からのアドバイスに沿うだけでなく、各教員の負担にも留意した持続可能なカリキュラム改定を期待したい。
総合評価（S・A・B・C）	A

## 2020年度【最終】事務部門点検評価報告書フィードバック

### 【質保証委員会からのフィードバック】

評価 S: 卓越した水準にある A: 概ね適切である B: 努力が求められる C: 抜本的な改善が求められる

基準	評価結果に対するコメント	改善事項	総合評価
1. 理念・目的	大学の理念・目的は適切に設定され、公表も妥当に行なわれている。理念・目的の実現に向けた2021～25年の新たな中期計画も策定された。また、年間3回程度、大学改革懇談会を開催し、外部講師を招いて大学・学校改革に資する講演と意見交換を行うようになったのも有意義な試みと言える。	2014年にSagami Vision 2020制定後、2020年までの達成状況と問題点についての検証をふまえて、中期計画の具体的な実行計画を立てることが望まれる。 大学改革をより一層加速するためには、その方向性の共有が重要なことから、大学改革懇談会における講師の選定や、出席者に法人理事を加えるなど、運営上の工夫が必要である。	A
2. 内部質保証	規程が制定されたことを受けて、質保証委員会が設置され、点検評価報告書に対するフィードバックも開始された。PDCAサイクルが機能し始めたということができる。	改善のためのフィードバックの仕組みづくりと、スケジュール通りの運用については、なお望むべき点がある。点検・評価結果をふまえた予算編成の実現に向けても、さらに調整を進める必要がある。	A
3. 教育研究組織	従来の学部・学科・センターに加え、専門職大学院の開設により、生涯教育に対する社会的要請に応える一歩が踏み出されたと言える。	専門職大学院の運営を安定した軌道に乗せることに加えて、リカレント教育や生涯教育の体制は検討していかなければならない。	A
4. 学習成果・教育課程・	コロナ禍によってオンライン化を急速に進させることになったが、現状のICT環境は必ずしも十分でなく、方法的にも多分に手探りでしかも待ったなしという困難な状況において、事務担当部署はよく努力し、教員と協力して職務を行った。情報システム課の設置が決定したことは、ICT環境整備に向けての前進と評価できる。	ICTの活用による教育方法の開発・確立は、コロナ禍によっていっそう必要度が高まったと言えるが、ICT環境の整備は喫緊の課題であり、規程面での整備とあわせて進める必要がある。	A
5. 受け入れ	全体として入学定員には達しなかった。コロナ禍のために募集活動に制限があったことを考えれば善戦したとも言えるが、コロナ禍の影響は長引くことが考えられ、あらためて募集戦略を練る対応を考えなければならない。	大学全体としては以前より受け入れ状況は向上しているものの、入学定員を充足するためのいっそうの努力が望まれる。	A
6. 教員・教員組織	基本的に適切に運用されているが、教職センターと子ども教育学科特支課程の教員配置など、近い将来に向けて検討が必要な部分もある。	コロナ禍もあり、専任教員の欠員補充人が十分に行えなかった面があり、その充足が課題となる。	A

基準	評価結果に対するコメント	改善事項	総合評価
7. 学生支援	コロナ禍にあって、対面による学生の交流の場が不足したため、新たなオンラインを活用した交流の場を数多く実施したのは良い取り組みと言える。	コロナ禍での学生の不安に応える体制の充実を図ることが必要である。コロナ禍が今後も長引けば、リモート授業や制限されたキャンパスライフへの不満などから退学希望者が増えることも考えられるので、抑制策を考える必要がある。課外活動においては、紹介の場を増やすことが課題となる。	A
8. 環境 教育研究等	ICT 環境の整備は急務であるが、情報システム課の設置が決定されたことは前進と評価できる。ラーニングコモンズも学生に認知されるようになってきている。	学内の ICT 環境を引き続き充実させる必要がある。ラーニングコモンズについては、さらに学生の学修に資する方途を考えたい。	B
9. 社会貢献 社会連携・	コロナ禍にあって活動は制限されたが、オンラインなどにより工夫をしながら取り組めた。	連携教育推進課と学部・学科との活動の交流や情報交換がさらに活発に行えるよう、改善が望まれる。学生の活動にとどまらない新たな連携が考えられてもよい。とりわけ地元と本学の結びつきを再確認し、強化する方向を探りたい。	A
10. (1) 大学運営・財務	コロナ禍で ICT 環境整備とオンライン授業等の支援体制の課題が顕著になった。今後早急に対応を進めたい。	学部長、研究科長の職務・権限が明確にされていないことは運営上の難点であるので、規程の中に明記し、大学ガバナンスを整備することが課題となる。	A
10. (2) 大学運営・財務	財務シミュレーションを引き続き実施し、各部の課題解決に取り組むことが重要である。	P D C A サイクルの中で予算編成の位置づけがやや曖昧で、課題解決に向けて必ずしも十分に機能していない。P D C A サイクルの中に予算編成を位置づけ、抽出された課題の解決につながる予算編成の進め方を検討することが必要である。	A